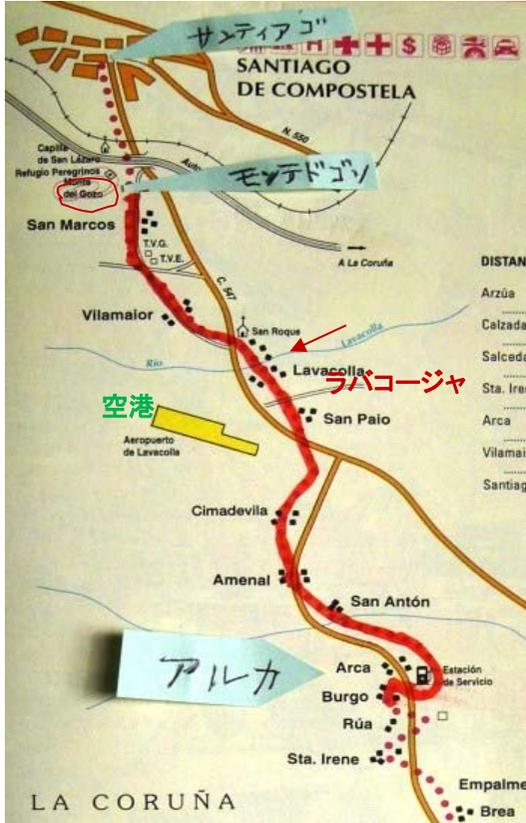


(10) 明日は モンテ・ド・ゴゾ、何としてもアルベルグに泊まりたい

10月25日(木) アルカの Hotel O Pino での午後、ゆっくりと昼寝を楽しんだ。

さて、明日はいよいよモンテ・ド・ゴゾ。最終目的地のサンティアゴまで、あと“4.4キロ”の地点。



そのモンテ・ド・ゴゾにはカミノ・デ・サンティアゴ最大規模の公設アルベルグがあり 800 ベッドが用意されている。それでも夏のシーズンには収容しきれないほどの巡礼者が押し寄せる。2年前はここに泊まるのを最初から諦め、近くの私設アルベルグに泊まり、カフェテリアだけを利用させてもらった。

たったの4.4キロ、わざわざ泊まるまでもないのだが、実は巡礼者にとっては特別な理由がある。それは、毎日の正午12時、サンティアゴ大聖堂で行われる“巡礼者のためのミサ”に与かるための時間調整なのだ。今回は、巡礼の記念にも、また、話の種にも、絶対に泊まりたいと計画していたのだが、一つ問題があった。公設アルベルグでは“予約”を一切受け付けないのがルール。モチーラを担いで到着した者から順に、ベッドの数に見合う人数だけが一泊の宿泊を許される。ということは、モチーラだけを先に送っても受け取っては貰えないということ。従って我々は今日まで公営のアルベルグには泊まれずに来た。さて、明日は15.7キロをどうするか。

歩く生活も5日間が過ぎると次第に身体の方が慣れ、我々は元気を取り戻しつつあったので、何もなければ大した距離ではないのだが、、、このオテルのフロント・マネジャーが英語を自由に話せることが分かって、石川が自ら流暢な英語で交渉し、最終目的地のサンティアゴ・デ・コンポステラに出発前から予約しておいたオテルまで1日先回りして二人のモチーラを送る手配を済ませた。

小野と山本の二人は巡礼の思い出としても最後まで頑張っって担ぐことにした。

サラマンカの矢島に携帯電話で近況報告した石川、「言われちゃったよ、『苦しいのを耐え忍んでこそ巡礼だ』って”。“そのとおり！折角来たこの道、荷物を担がないなんて巡礼じゃないね”と言おうとした言葉を飲み込んだ。「そうだね、もう充分耐えてるもんね」顔を見合せて笑った。

ちょっと一休み 巡礼一言メモ：

巡礼用具：杖、ひょうたん、ホタテの貝殻



道路上にタイルで描かれた巡礼用具

古い昔のサンティアゴ巡礼者の絵画や彫刻には、長いマントを翻らせ、皮製の長靴に一本の長い杖を持ち、ひょうたとホタテの貝殻をぶらさげている姿が描かれている。現在では、全てが歩くのに適した軽装備になった。通気性がよく防水防寒性に富んだウェア上下、ポンチョ、トレッキングシューズ、グラスファイバー製のステッキ、ひょうたんに変わるペットボトル。そしてホタテの貝殻は巡礼のシンボルとして土産物屋で売られているが、何故ホタテの貝殻なのか？様々に言われているが、自分で都合が良いように考えて差し支えはないようである。これで水を汲んで飲んだり、“おもてなし”を受けるときに使うなどと想像するのも好し、要するにこれをぶら下げて歩き、巡礼の旅を楽しめば良い。



山本の巡礼用具



巡礼資料